

昨年、相模原市内にある米軍住宅内アーン小学校の先生やスタッフの方々と連携したイベントを行いました。担当の Ben 先生からのメッセージです。

アーン小学校の生徒およびスタッフ一同は、生徒たちの科学的探究に対する理解をさらに深め、やる気を一層伸ばすために、KU-MA（子ども・宇宙・未来の会）との新たなパートナーシップをとっても大切に考えています。

アーン小学校は、相模原住宅地区（在日アメリカ陸軍の基地、通称座間キャンプ内）に位置しています。在日米軍の小学校が期待されている役割の一つに、地域社会と友好関係を築くことがあげられます。アーン小学校の職員は、ホスト国とのパートナーシップもその一部であると強く信じています。実際、アーン小学校の校名は過去に九州地方の児童養護施設でボランティア活動に携わった、ジョンO.アーン米陸軍少佐にちなんでつけられました。このたび、KU-MAの協力のもとに「宇宙の学校」をスタートできたことは、当校にとって日本のみなさんと友好的な関係を築くという伝統を引き継ぐ素晴らしい機会となりました。

アーン小学校では2月に行われたKU-MAスタッフによるボランティア研修を経て、3月から4月にかけて2回、試験的にスペーススクールを開催しました。まず3月に、生徒（6～9歳）とその家族たちは、航空力学の基本概念を取り入れた傘袋ロケット作りに励みました。翌月には手作り凧と熱気球を作成し、さらに楽しく知識を深めました。ボランティアで集まった先生と生徒の家族たちは、KU-MAのスタッフと協力して、子供たちを魅了するプログラムを作り上げることができました。

アーン小学校は「科学を学ぶことは子供たちとその家族にとって魅力的で楽しいものである」というKU-MAの理念に深く共感しています。

今回のスペーススクールのまとめとして、生徒たちには、作成したロケットや凧を家庭に持ち帰り、家族とともにさらなる改良を加えて飛ばしてみるという課題が与えられました。私たちは今後さらに、生徒たちとその家族と一緒に取り組むことができる活動を推進したいと考えています。

2回にわたる試験的試みの成果を踏まえ、新年度はスペーススクールプログラムを3回以上に増やしたいと考えています。また科学的探究に対し、これまで以上に家族で取り組んでもらうために、生徒たち全員に家庭で保護者とともに科学の課題を仕上げてもらう予定です。そしてプログラムの最終日には家族ごととその結果から学んだことをレポートにまとめて発表し、ほかの生徒や家族と体験や成果を共有してもらうことを計画しています。

アーン小学校は、このたびのKU-MAとの新たなパートナーシップを大いに歓迎しています。さらに、子供たちとその家族のために常に献身的に取り組まれ、当校におけるスペーススクール導入に向けて多大なるご尽力頂きました平林先生へ心より感謝申し上げます。



▲スタッフの方々と研修会 かさ袋ロケットやスチロール凧の作成



▲アーン小学校の子どもたち、スタッフと一緒に！ 上段 左端が Ben 先生

=== 保護者 & 開催ボランティアスタッフ
ハンソンさんからのメッセージ ===

スペーススクール/アーン小学校のイベントの開催ボランティアをしつつ、小学1年と3年の子供と一緒に参加しました。宇宙の学校のプログラムは、航空宇宙学・物理学・その他いろいろな学びに通じていることに大変驚きました。工作ロケットや凧を各個人さまざま形へ改良しながら、どんどん遠くへ、安定して飛ぶ様子を見て楽しむ子供たちを眺めていると、Ben先生が子供たちに語りかけた“10年後スペースミッションに参加し、宇宙から先生へメッセージを送ってほしい”という願いが実現するのではないかと思います。素晴らしい体験をさせて頂き、ありがとうございました。

KU-MAとわたし 宇宙の学校 ボランティア

国分寺市「宇宙の学校」
ボランティア

会員 橋口 薫



国分寺『宇宙の学校』をお手伝いさせて頂いています。国分寺は元々、ペンシルロケット発祥の地で理科離れの子供達をなくそうと小学校5年生から市の行った『科学センター』という理科教室が土曜日に市内の学区の枠を超えて募集されていた所です。

私の子ども達は隔週土曜日がお休みになった時に小学5年生を迎え『科学センター』との出会いとなりました。机の上だけではなく、子ども達の興味が、知る喜びに変わるきっかけになる毎回の楽しかった授業が昨日の事のように思い出されます。その後、隔週土曜日休みから、週休2日になり、土曜日の子供達の居場所は、更に様々に…私達は親子で、そして同級生達と自然の現場でたくさんの体験をさせて頂きました。

その時にお世話になった先生方との出会いがあり、子ども達が高校生になった頃、『科学センター』に繋がればと、幼稚園年長から小学4年生までの『宇宙の学校』がスタートされたのです。国分寺のスタッフは当時小学生だった子ども達と親が、お世話になった先生方への恩返しでお手伝いさせて頂き現在に至ります。子ども達は今年20代半ばを迎えるようになり、それぞれの旅立ちもあり、地元の高校生達の手も借りながらお手伝いしています。

『宇宙の学校』での小さな子ども達の、分かった時の満足気な喜びの笑顔や保護者の方達との歓声のシーンが毎回やりに繋がっています。

数年前、奥州市の『宇宙の学校』を何度かお手伝いさせて頂いた時に、全国で同じ活動の中、それぞれの土地柄の素晴らしさも改めて知る事ができました。

そんな東北行きをきっかけに3年前からは国分寺もお手伝いさせて頂きながら、石巻へも訪問（ボランティア支援）するようになりました。石巻はまだ復興真っ只中です。それぞれの皆さんが子ども達に笑顔と願う気持ちは一緒です。色々なイベントのワークショップからでも、いつか石巻の子ども達にも『宇宙の学校』が紹介できたらいいなと思っています。

子ども達への『なぜ？どうして？解ったよ！！』の笑顔は全国共通です。そして学びに来ている子ども達もずっと繋がって欲しいなと思っています。素敵な出会いが全国に広がっている活動をこれからも応援しています。



Q: 理科の先生になってからの経験と合わせて、理科教育をどう考えていますか？

「わかりやすく楽しい授業」がいい授業ではないんです！「教科の本質に沿った面白い課題を与えられ、生徒が自分でやる気になる」、そういうのがいい授業。今、教育改革でアクティブラーニングが取り入れられつつあるが、これは、まさにやられるのではなく、好きなことを自分で見つけて主体的に学ぶようにすること。今後、AI（人工知能）の発展でコンピューターに置き換わる仕事がいっぱい出てくる。そんな時代に適応できる人に育ってもらいたい。

Q: どんなお子さんでしたか？

小さい時分過ぎた金沢で近所に下駄屋さんがあり、ナイフやのみの使い方を教わった。いい道具で、ワクワクした。中学では自分で天体望遠鏡を作ったりアマチュア無線の資格を取ったりしたが、小遣いが足りなくて欲しいものが買えずもどかしかった。壊れたテレビを拾ってきて部品を集めたり、ダイポールアンテナを自作したりした。

東京の工業高校へ進んでからは好きなことをやりたい放題。発光ダイオードとフォトトランジスタと出会って光通信に夢中になり、半導体が面白くなった。そして東京理科大へ。受験のたびにやりたいことを我慢させられたなあ…。



今回お話を聞いたのは、昨年理事に就任された稲葉茂（いなばしげる）さんです。神奈川県相模原「宇宙の学校」の先生、の方がなじみのある方もいるかもしれませんが、県内の中学校5校で理科教師や校長を、また教育委員会の仕事も務めてこられました。

インタビュー
菊地 涼子